

「窪院死去、六十九カ。数年中風ニテ無音ナリシ。」

「昨日、竹林院中風煩出シ、半身ナエタリト云々。既ニ今朝死去セリト、四十九カ。」

「死スル時ハ中風ニアイ頓死スベキナリト。」

次に、耳風という言葉は一例だけで病状の描写がないが、病源候論を見ると耳風聾という名で突発難聴のような症状の記述がある。

やはり風というのは突然襲うものという観念があるようである。

頭風は次の一例がある。

「深宗ハ頭風オコリテ俄ニ吉野参延引ス。」

これも俄に起る病であるが、和名類聚方では頭風にカンライタミという訓をつけているので、偏頭痛のようなものかと思われる。

以上のような用例に検討を加えて、わが国の中世末期の風病の概念をいささか解明したい。

(神奈川県綜合リハビリテーション事業団七沢老人リハビリテーション病院循環器科)

ロールシャッハ・テストの起源と スイス精神医学史

小俣 和 一郎

現在臨床的に最も広く用いられている投影的心理検査法の一つロールシャッハ・テストの起源がユステイヌス・ケルナー (Justinus A.C. Kerner, 1786-1862) のインクのみ図版 (Klecksographie) にあることは、すでにエレンベルガーらが早くから指摘している。しかしこのケルナーの名はもとより、ケルナー自身の人と生涯に関しては一部の分野を除きわが国ではほとんど知られていない。筆者は近年フィリップ・レクラム社から出版されたケルナー選集 (Ausgewählte Werke, 1981) を手に入れ、医師としてのケルナーの人と業績とについて知り得る機会を得たので、この人物とヘルマン・ロールシャッハ (Hermann Rorschach, 1884-1922) との性格的関連性および思想上の類似性を指摘し、併せてスイス精神医学史という大枠の中でこの二人

が果した役割を考察してみたいと思う。

ケルナーはいわゆる放浪の医師として有名なばかりではなく、詩人としてもドイツ文学史上に相応の役割を果した人物と思われ、その個人的伝記、書簡集、著作、種々の解説本などを合せるとドイツ語圏だけでも現在までに一五〇以上の出版物が刊行されている。ケルナーの詩の大半は、彼自身親交のあったドイツ後期ロマン派の代表的詩人ウーラントの影響もあってかロマンチックな色彩の濃い叙情詩によって占められている。医師としてはテュービンゲン大学に学び、外科医でもあり精神科医でもあった同大教授アウテンリート (Johann H.F. Autenrieth, 1772-1835) に師事して、テュービンゲン大学精神科のもととなった Alie Klinikum に入院したばかりのヘルダーリンの精神症状を観察している。当時はドイツ精神医学のいわば草創期に当り、ロマン主義的医学の強い影響下に初期の単一精神病学が着想されようとしていた頃であって、これがケルナー自身のロマン主義的性向をさらに助長し、後に各地を放浪させ、磁気療法による詳細な一治験例として有名になった「プレフォルストの千里眼女」を書かせ、ひいては視力の

衰えた晩年になって多くのクレクソググラフィを残させる主要な契機ともなったと考えられる。

ロールシャッハが生をうけたのは、人間の心の暗く果しない神秘的な領域に強い関心を抱いたロマン主義的精神医学の晩期の徒であったケルナーの死から十二年後のことであつた。ロールシャッハもまたケルナーと同様にロマン主義的なパーソナリティの持ち主であつたことは、エレンベルガーがつとに強調して指摘しているところである。彼によればロールシャッハは明らかにオストヴァルトのいう「ロマン派的天才」の範疇に該当するといふ。ともあれロールシャッハが間接的にせよケルナーのインクのしみ図版から、現在の投影法的心理テストを導き出したことは、全くの偶然というよりも両者の間に共通するロマン主義的性向を無視しては考えにくい。

こうしたロマン主義的伝統は、少なくとも精神医学史上では一九世紀後半以降ドイツ本国から急速に駆逐されてしまう。むしろグリーンジンガーただ一人にこのことの責任があるのでは全くない。むしろグリーンジンガー自身はボダーマー (J. Bodamer, 1948) が述べるようにロマン主義の影

響を相当にうけていた学者であろう。スイスの大学精神医学の実歴上の歴史はグリージンガーによる一八六〇年のチューリヒ大学精神科（いわゆるブルクヘルツリ）の創設に始るが、ここではその後もかたくなな器質論だけが幅をきかすようなことはなかった。今日でいう生物学的精神医学とともに精神分析や現存在分析がこの国に共存しているのも、ナチス時代に多数の亡命ユダヤ人を受け入れたスイスのいわゆる「スイスの寛容さ」（ウィルシュ）に起因しているのかもしれない。ケルナーの晩年に至ってドイツ本国から追放されたロマン主義的精神医学がロールシャッハという「ロマン派的天才」を通じてこの国に流れこみ、スイス精神医学の成立と発展の歴史に一つの修飾を与えていると考えるのは筆者の独断にすぎるであろうか。ロールシャッハ・テストは当時の「非ロマン主義的」ドイツ精神医学界から手厳しく批判されたものの、本国のスイスでは決して否定されることはなかった。このことはオーストリアで生れた精神分析学が本国では今日でも決して正当に評価されてはいないことと比較すれば、きわめて対照的なことといわざるをえない。

（富士市・大富士病院）

ビダール（勿多児・Jean Paul Isidore Vidal 1830-1896）の生涯

業績

○蒲原 宏・清水陽人

明治初期に新潟医学校・富岡製糸工場・横須賀造船所のお雇い医師として活躍した、フランス人ジアン・ポール・インドル・ビダールについては詳しいことが不明であったが、その生涯と業績について調査したので報告する。

ビダールは一八三〇年二月二十一日フランスのオード（Aude）県のサル・シエール・レルス（Salles sur Lhers）村に生れ、一八四八年リール（Lille）で研修、一八五三年モンペリエ（Montpellier）大学で医学博士、ついでフランス軍軍医としてベトナムやアフリカのアルジェリで勤務し、一八六七年除隊している。

その間従軍の功によりレジオン・ドノール勲章を受けているが、明治六年（一八七三）一月来日し、林欽次の経営する迎義塾（東京）の教師となっている。同年五月十五